「好奇心」

―初稿―

2024/5/7

米俵

〈人物表〉

神田　佑太　（13）　私立中一年生
橘　湊　（13）　私立中一年生
大橋　奈々　（13）　私立中一年生
児島　浩二　（13）　私立中一年生
やません　（48）　山本先生。一年の学年主任

〈ログライン〉

・佑太たちはこっくりさんをやろうとするが、児島が来てやめる話

〈ねらい〉

・何も起こらない話を書く
・ことわざ「好奇心は猫をも殺す」＝「強い好奇心は身を滅ぼす」

1.

学校・教室（夕）

ホームルームの終わった教室。パラパラと帰宅を始める生徒たち。
テスト範囲の書かれた掲示物。
神田佑太（１３）と橘湊（１３）が合図するように目を合わせる。
大橋奈々が帰ろうとするが、後ろの座席の佑太が大橋奈々（１３）のバッグを掴む。
奈々、佑太を一瞥して溜息をつきドカッと座り直す。

× × ×

誰もいなくなった教室に三人だけが残っている。
佑太と奈々の方にニヤけた表情の湊が近付いてくる。

湊　「で、佑太、今日は何やるの？」
佑太　「こっくりさんだよ」
湊　「何それ」
　奈々、大きな溜息。
奈々　「私、帰るから」
佑太　「待てって」
奈々　「塾あるから。二人でやりなよ」
湊　「奈々、こっくりさんって知ってんの？」
奈々　「聞いたことはある」
佑太　「奈々ー、帰るなよー」
　佑太、奈々のバッグを掴み直す。
奈々　「くだらないことしてないで、佑太と湊も勉強しなよ」
佑太　「勉強はもういいだろー。せっかく同じとこ受かったんだし」
奈々　「あんたみたいな馬鹿と同じ学校なのが悔しいわ」
佑太　「俺、やれば出来る子だから」
　佑太、手でハートを作る。
湊　「付き合ってやれば？　馬鹿出来るのも今だけだし」
　佑太、大きく頷きながら、
佑太　「そうそう」
奈々　「あんたは大人になっても馬鹿だよ」
佑太　「そういうとこが好きなんでしょ？」

奈々、無視して、
奈々「成績、落ちたらあんたのせいね」
湊「で、こっくりさんって何よ」
佑太、得意気に、
佑太「昔流行った降霊術だよ」
奈々「あれは、不覚筋動で動いてるだけだって」
湊「なんだ。奈々詳しいじゃん」
奈々「あーうん。一時期ちょっと……」
佑太「筋肉のせいだったとしても！　俺はやってみたい」
奈々「なんで、そんなにやりたいの？」
佑太「ただの好奇心」
奈々、呆れた表情。
湊「まあ、昔からこういうヤツだし」
奈々「ふざけてやるもんじゃないと思うけど……」
湊「どこでやんの？」
奈々、佑太の席を指さして、
奈々「ここでいいでしょ」
佑太「俺の席は……なんか嫌だ」
湊、馬鹿にしたように、
湊「なんだよ。佑太、びびってんじゃん」
佑太、立ち上がって、
佑太「じゃあ、湊の席でやろう」
湊、佑太を引き止めて、
湊「よく知らないもんは俺の席でやりたくない」
奈々、ちょっと笑って、
奈々「なんだ。2人共、怖いんだ」
佑太「奈々の席でいいか……」
奈々「やだ」
湊「席すら決まらないとか……」
奈々「教卓の前の席にしよ」
三人、一斉に座席を見る。
佑太「こじこじの席か……」
湊「あいつなら、何かあっても許してくれそうだな」
佑太、手を合わせて、

佑太　「こじこじ、すまん……」

×　×　×

教卓の前の座席に集まっている3人。

机の上には佑太のタブレット。タブレットには50音、はい・いいえの文字と数字が書かれている。

湊　「本当にこれで大丈夫か？」

佑太　「こっくりさんにもデジタルの時代がきてると思う……」

奈々　「これ、コインが滑り過ぎない？」

湊　「確かに……」

佑太、少しふてくされて、

佑太　「白い紙がなかったんだよ」

奈々　「仕方ないなー」

奈々、バッグから紙を取り出し、渡す。

佑太　「流石！」

湊　「奈々、持ち歩いてんの？」

奈々　「絵、描くようにね」

3人で、準備を始める。

×　×　×

机の上に50音、はい・いいえの文字と数字が書き終わった紙が置かれている。

静かな教室。

佑太　「めちゃくちゃ、それっぽくなったな」

奈々　「やっぱり、やめない？」

湊　「怖くなった？」

佑太　「ここまで書いたのに？」

奈々　「そうなんだけど……あんまり良くないっていうか」

湊　「でも、さっき、不覚なんとかって言ってたじゃん」

奈々　「不覚筋動ね……」

浮かない顔の奈々。

その時、廊下を歩く音がする。

佑太、小声で、

佑太　「やばい。やませんかな？」

静かな教室に近付いてくる音。

三人、教室の扉の方を見る。

教室の前で足音が止まる。
教室の扉が開く。
児島浩二（13）が教室に入ってくる。
児島、3人がいたことに驚いて、
児島「何してんの？」
3人、ほっとして、
佑太「なんだよ、こじこじかよー」
児島「え？」
湊「やませんかと思った」
児島「ってか、俺の席で何してんの？」
奈々、慌てて立ち上がって、
奈々「あっ、ごめん。席借りてた」
児島「いいけど……何これ」
佑太「こっくりさん。こじこじ、知ってる？」
児島「知らない」
佑太「こじこじもやる？」
奈々「佑太、やめなよ」
児島「やらない。忘れ物取りに来ただけだし」
湊「忘れ物？」
児島「これ」
黒い保冷バッグに入ったものを机から取り出す。
佑太「なにこれ」
児島、袋から弁当箱を取り出す。
湊「くっさ」
佑太「やっば」
奈々、けわしい顔。鼻をつまむ。
児島、嬉しそうに、
児島「4週間前の弁当箱」
湊「は？」
佑太「お前っ、ふざけんなよ」
湊、口呼吸で、
湊「なんで今更」
奈々、ふり絞った声、
奈々「早く。それ、しまって……」

児島　「はいはい」
　　児島、弁当箱を戻す。
奈々　「席、座っちゃった……」
　　児島、笑って、
児島　「弁当菌はついてないと思うよ」
佑太　「あー、こじこじのせいで、なんか冷めたわー」
湊　「一番、やべー奴が近くにいたな」
児島　「人の席で、こっくりさんやってる方々に言われたくありませんが？」
佑太　「お前、こっくりさん、知ってんだろ」
　　児島、急に小声になって、
児島　「佑太、お前みたいな奴が一番危険だぞ」
佑太　「なんだよ、それ」
児島　「好奇心は猫をも殺すってこと」
　　佑太、児島を小突いて、
佑太　「ふざけんな」
湊　「当たってんじゃん」
児島　「君達、こういうのは軽々しくやるもんじゃないんだよ」
奈々　「えっ、こじこじって、そういうの見える人？」
児島　「どうだろうね」
佑太　「もういいよ、お前ー」
　　笑っている児島。
湊　「帰るか」
　　各々バッグを持って、廊下に出る。

2.

学校・廊下　（夕）

　　４人並んで歩く。
佑太　「こじこじ、責任取れよなー」
児島　「何のだよ」
佑太　「決まってんだろ、こっくりさんぶち壊しのだよ」
　　児島、からかうように、
児島　「座席使用料、頂きます」
佑太　「お前、マジ腹立つ」
　　児島、弁当の袋を見せて、

児島　「弁当、いる？」
佑太　「いらねーわ」
湊、奈々、二人を見て笑っている。

3.

学校・校門前　（夕）

４人、談笑しながら帰っていく後ろ姿。

4.

学校・教室　（夜）

暗い教室。
床に落ちている白い紙。

（終わり）